

## サロン・ド・リーブル・ジュネス「日本年」

### 実施報告書



2004年3月

サロンドリーブル・ジュネス「日本年」実行委員会

## 日仏の子どもと子どもの本の明日のために

サロン・ド・リーブル・ジュネス「日本年」実行委員長  
社団法人 日本書籍出版協会副理事長  
小 峰 紀 雄

サロン・ド・リーブル・ジュネス開催にあたり、日本の子どもの本を紹介する機会をいただいたことに、まず感謝の意を表します。貴国フランスの文化に対する日本人の尊敬と愛着は、貴国の文化が日本に伝えられて以来、時代や状況により紆余曲折があったにせよ変わりなく続き、日本の近代化と日本の文化の形成に欠かせない影響をもたらしてきました。貴国の人々によってしばしば日本の文化が再発見されました。その歴史は、日本の文化が貴国に伝えられ、理解が深まってきた歴史でもありました。出版文化の場合も、子どもの本を含め、貴国のすぐれた思想、芸術、文学が伝えられてきました。

日本におけるフランスの子ども本の紹介は、1878年に翻訳出版されたジュール・ベルヌの『新説 八十日間世界一周』前編によって始まりました。以来『ペロアの昔話』やサン・テグジュペリの『星の王子さま』など、今なお多くの子どもたちに読み継がれています。近年両国間の翻訳出版には目ざましいものがありますが、子ども本は一般書に比較し、まだまだこれからです。

近年の日仏出版文化交流はめざましく、1997年にサロン・ド・リーブルで開催された「日本年」そして、翌98年に東京国際ブックフェアで開催された「フランス年」は、両国の出版文化交流を深めた意義ある事業でした。この度のサロン・ド・リーブル・ジュネスの「日本年」は、その交流の延長線にある貴重な事業であります。このたびの日本の子ども本の展示は、日本的な作品でビジュアルなものを中心にしました。文化の異同を理解することが、日仏両国のより深い交流をもたらすと考えたからです。このたびの事業が、多くの問題を抱えて生きている子どもたちへのなんらかの希望のメッセージになるように、日仏子ども本のかけ橋になるよう心から願うものです。

(2003. 11. 26 サロン・ド・リーブル・ジュネス開会式でのあいさつ)

## 実施概要

1. 日時 2003年11月26日(水)～12月1日(月)
2. 会場 モントルイユ市 展示ホール



- |         |     |         |       |        |
|---------|-----|---------|-------|--------|
| 3. 開場時間 | 26日 | 9時—18時  | 27日   | 9時—18時 |
|         | 28日 | 9時—22時  | 29日   | 9時—20時 |
|         | 30日 | 10時—19時 | 12月1日 | 9時—18時 |

### 4. 日本からの出展図書

40社 328点

※寄贈先＝パリ市立図書館（総館数65館、うち52館に児童用部門があり、13館は子ども専用図書館）



### 5. 主要日程

- ①開会式 26日 午後6時 於・日本コーナー  
あいさつ 小峰紀雄・サロン・ド・リーブル・ジュネス「日本年」実行委員長  
(アイアゴン文化大臣、クレマン・セヌ・サンドニ県知事等が臨席)
- ②バイヤール社見学 28日 午前11時～午後1時
- ③フランス出版協会との懇談 28日 午後3時～5時  
小峰実行委員長、土門康男氏（講談社児童局長）  
サルザナ専務理事 他
- ④招待レセプション 29日 午後8時 VIPルーム

⑤シンポジウム 12月1日 午前10時半～午後1時半

第1部 日本の児童書出版について

小峰実行委員長、吉田ゆりか氏(日本著作権輸出センター)、コリーヌカンタン氏(フランス著作権事務所)



第2部 日本の小出版社の立場から

若月真知子氏(ブロンズ新社)、小西宏行氏(スワイッシュ・グラフィクス) 他

第3部 マンガ探求

細萱敦氏(川崎市市民ミュージアム) 他

#### 6. 招待作家

いわむらかずお氏 駒形克己氏

五味太郎氏 藤野千夜氏

辻仁成氏

細萱敦氏(川崎市市民ミュージアム)



#### 7. その他訪問先

パリ市立図書館

文化省国立書籍センター・児童書普及局

エピネー市図書館(セーヌサントニ県図書館協会)

フランス読書推進協会 等

## 「日本年」報告

二つのテーマである「日本」と「愛」は、大変好評を博し、各メディアにそれぞれオリジナルな形で取り上げられた。

### 入場者

6日間で来場者 14 万人以上 (昨年 13,5 万人)。

学生団体枠では、1,142 団体=29,523 人 (同伴者：約 3,400 人)。

本年度に一番注目すべき点としては、Seine-Saint-Denis 県の小、中、高生の入場増加が上げられる。小中高生の総入場者のうち、40%が Seine-Saint-Denis 県出身で、その数は 2002 年の 8,779 人に対し 2003 年には 12,103 人に増加した。

- 中学生が圧倒的に大勢：12,625 人、特に 1 年生 7,285 人
- 小学生 7,975 人、Centre de loisirs (文化センター・クラブ) 3,185 人
- 幼稚園 1,424 人(65 団体)
- 高校生 1.612 人

出版／教育など関係者：17,000 人

作家・イラストレーターの来場：750 人

作家・イラストレーター1,090 人によるサイン会が出展者により開催

### 出展スタンド・出展者

出展者数は 230 社。うち 48 社が新規出展で、会場出展スペース 3500 m<sup>2</sup>のうち、243 m<sup>2</sup>を占めた。

「小さな出版社の大きな市場」という名前のスペースで今年は 40 社位が出展した。今回特別に、日本の児童書小出版社 3 社が招待され、出展した。

今年は、青少年向け雑誌のキオスクで 20 の出版社により雑誌 80 タイトル／種類位を展示した。このプレスのスペース 30 位の対談、催し、ワークショップやコンサートが開催された。

6日間で 253 のイベント (対談、ワークショップ、朗読、ショー、展示やアニメの上演など)：学校対象 128、一般対象 48、出版・教育関係者対象 79。

日本の児童書出版社と良い関係を齎し、この機会に約 330 点以上の作品を紹介した (開催後、日本からの出展図書がパリの Faidherbe 図書館に寄付された)。

展示スペース内では書店と対談スペースが隣り合わせであった為、見本市の中で招待国日本が目立ち、アピールできた。

### 日本関係図書の販売

パリのジュンク堂書店も初出展し、とても満足できる結果となった。予想を遥かに超える売上げに達した。



#### ジュンク堂書店売上げ (サロン・ド・リーブル・ジュネス会場内)

区 分	販売額	販売冊数	客数	客単価
日本雑誌	188.70 €	35	30	6.29 €
日本書籍	10,033.53 €	693	493	20.35 €
その他日本年関連商品	7,545.46 €	1511	901	8.37 €
フランス書籍	21,560.22 €	1895	1127	19.13 €
その他フランス製品	319.96 €	61	51	6.27 €
合 計	39,647.87 €	4195	2602	
1 日当り平均	6,607.98 €	699.17	433.67	

### ワークショップ・講演会等

100 の対談、ワークショップ (数は 45) などが開催された。Guimet 東洋美術館の協力により、折り紙、習字などのワークショップが行われた。日本語並びに俳句入門クラスも高く評価された。

特に二人の招待作家である五味太郎氏と駒形克己氏によるイラスト・クリエーションのワークショップが大人気を博した。ワークショップを通じ、大人も子供も活発で独創的にフェアと児童書の世界に接する機会を得た。これら催しは継続する予定である。

Forum des images との計画による映画上映プログラムは、プレミア発表等も含め、豊富で想像力に富んだ日本のアニメを強調する為に不可欠な作品を紹介した。

小、中、高生対象に行われた、いわむらかずお、藤野千夜および辻仁成の各氏との対談に来た子供達が、前もって作品を学校で読書しており、作家達への質問を準備していたため、ためになる話し合いの機会になり、作家の世界へと誘われる良い時間となった。皆、溶け込んだ様子で、暖かく熱心に対話を交わした。同様に、Corinne Quentin, Dominique Palme, Helene Morita, Maurice Coyaud 等の翻訳家の同席も好評だった。

今回の催しへの有名作家の参加は、大きな貢献となった。

### 会場外での催し

教育的でありながら遊び感覚のある「虫眼鏡で見るまんが」の展示（パリ市、Pierrefitte-sur-Seine 共同企画）は常に賑わっていた。展示作品の関連マンガを隣接された読書スペースでそれぞれ思い思いに手にできる点は、高く評価された。この展示は2004年にわたり、パリ市内の文化センターや図書館で巡回する事は興味深い。

見本市との協力で、Seine-saint-Denis 県の Bagnolet, Montreuil, Saint-Ouen, Pantin 市の4つの図書館にて、駒形克己 (l'association des 3 ourses 主催) の作品を中心に展示した。対談、ワークショップ、童話を通し、「日本」をさまざまな方法で来館者を対象に紹介した。

### 児童書出版賞

11月27日（木）夜、3賞絵本バオバブ(Baobab)賞、児童書のタムタム(Tam-Tam)賞、子供用の雑誌(Presse des jeunes)賞の受賞式開催。

1) Presse des jeunes 賞：新しい賞。テーマ「今日の世界を理解する為に」この賞は児童雑誌組合によって設立。ノンフィクション作品2作が受賞、チャイルド部門：(8才以下)ならびにジュニア部門(8才以上)。

\*フェアの協賛社である Telerama 誌, Le Monde 新聞, Lire 月刊誌, L'Humanite 新聞, Liberation 新聞は特集号を組んだ。「日本と愛」のテーマも大きく取り上げられ、68万部の国内版"Telarama"にフェアのプログラムを折込み、更にフェアの1週間前 15万分増刷。

以上

## 出 展 社 一 覧

出版社名	出展冊数				
	絵 本	フィクション	ノンフィクション	Y A	計
あかね書房	5				5
あすなろ書房	1				1
アリス館	5				5
偕成社	8	2	1		11
学習研究社	2				2
金の星社	8	2			10
くもん出版	3		1	1	5
佼成出版社	8			2	10
講談社	3	3		1	7
国土社	5				5
こぐま社	15				15
小峰書店	20	1	15	4	40
さ・え・ら書房	1		4		5
至光社	1				1
集英社	4	2	1		7
小学館	4	4	5	2	15
女子パウロ会	7		1	2	10
すえもりブックス	2				2
鈴木出版	7				7
セーラー出版	3				3
大日本図書	1				1
チャイルド本社	10				10
汐文社	10				10
童心社	8			2	10
日本放送出版協会	1				1
農村漁村文化協会	12				12
PHP 研究所	2				2
ひかりのくに	10				10
ひくまの出版	4	2	3		9
福音館書店	25		5		30
文化出版局	6			1	7
文溪堂	6				6
文研出版	10				10
平凡社	3	1	6		10
星の環会	4				4
ポプラ社	2	2	1	2	7
ほるぷ出版	7				7
マガジンハウス	1				1
光村教育図書	5				5
理論社	4	4		2	10
合 計	243	23	43	19	328



## 収 支 決 算

## 収入の部

出展料		729000
	2000 円 × 328 点	656000
	500 円 × 150 点	75000
収入計		731000

## 支出の部

輸送費		
	出展図書	221059
	その他	1950
翻訳料	500 円 × 150 点	78750
振込み手数料		1890
会議費		70118
記念品代		46515
交通費		19238
通信費		21745
事務局出張費		260000
報告書作成費		9735
支出計		731000

## 日本の児童書の現状と課題

2003年10月

### (1) 日本の出版状況と児童書の出版状況

2002年の日本の出版物(書籍・雑誌合計)の推定販売金額は、2兆3,3105億円であり、97年以降6年連続で前年を下回った。その内訳は、書籍が0.4%増の9,490億円、雑誌が2、1%減の1兆3,615億円である。出版点数は、書籍72,055点、雑誌は3,489点。書籍の一回り平均定価1,228円(前年比101%)、雑誌の発行平均定価は438円(前年比100.9%)である。書籍がわずかに回復したとはいえ、『ハリーポッター』という突出したベストセラーなどによるものであり、長期低落傾向が続いている。その要因は、日本経済の長期低迷が背景にあるにせよ、インターネットや携帯電話の普及による情報収集やライフスタイルの変化、新古書店の拡大、公共図書館の予算減と貸し出し増など複合的である。

2002年の児童書の新刊発行状況は以下の通りである。新刊点数3,867点(前年比115.7%、全書籍構成比6.3%)、この中で翻訳出版の点数は、500点を超える。推定発行部数2,634万冊(前年比115.7%、全書籍構成比6.3%)、推定発行金額32,348百万円(前年比123.6%、全書籍構成比6.5%)、平均定価1,228円(前年比106.8%)である。この上昇率は、『ハリーポッター』などのファンタジーブームによるものであり、それらを除く基礎部分は好調ということではできない。ちなみに83年に比較すると、1点当たりの初版発行部数は半減している。この20年来、児童書は長期低落状況にある。この間の子どもたちの「読書離れ」は、年々深刻化し、「本離れ・活字離れ」として、いち早く児童書に現れたのではないかと考えている。しかし近年、子どもの読書推進運動が活発に展開され、子どもの読書環境は大きく変わりつつあり、子どもたちの読書量も増え、児童書の出版活動も活性化し始めている。

### (2) 日本の子どもの読書状況

子どもの読書状況に関しては、さまざまな調査・報告がある。たとえば「5月1か月間の平均読書冊数(雑誌・コミック除く)」を調査した「学校読書調査」がある。93年では小学生6.7冊(7.5冊)、中学生1.7冊(2.5冊)、高校生1.3冊(1.5冊)。不読者(0冊回答者)は、小学生12.1%(8.9%)、中学生51.4%(32.8%)、高校生60.8%(56.0%)。※( )は2002年度。近年の読書推進運動が、さまざまな成果を生み、この調査のように子どもの読書状況は好転し始めているとはいえ、多くの課題がある。「読書離れ」は、社会環境や生活環境、教育環境、メディア環境などの変化の複合的要因から生じた根深い問題である。

OECDの調査は、「趣味としての読書をしない」と回答した生徒の割合は日本が55%で、調査した32カ国中最多と報じられている。

テレビとの関係では、2001年調査によれば、小学5年生の平日のテレビ視聴時間は平均162分。一日2時間として年間730時間。さらにビデオ・ゲームが加わる。小学校の年間授業時間数は実質700時間である。電子メディアと脳あるいは言語の関係が問題にされ始めているのも最近の特徴である。

### (3) 日本における子どもの読書推進運動

この10年来の子どもの読書環境をつくる活動の特徴は、民間同志が協力関係をつくり、政治が党派を超えて連携し、さらに政治、行政、民間がそれぞれの領域と立場で、子どもの読書の問題に取り組み、連携・協力したことである。その背景には、子どもの「読書離れ」に対する危機感があり、「読書離れ」の根底には「言葉離れ」があり、言葉の獲得と言語環境あるいは読書環境が深い関係にあるという共通認識があったと考えている。

1993年は、子どもの読書活動が大きな転回点をむかえた年である。同年3月、民間において、書き手、作り手、渡し手が、子どもと本の豊かな出会いを求めて「子どもと本の出会いの会」を創設した。同年12月、同会との連携組織として超党派的な国会議員による「子どもの本の議員連盟」が設立され、当面の活動として「学校図書館法の改正」と「国立子どもの本の館（仮称）」をかかげた。この運動を出発点として多様な読書推進運動が展開され、その中から子どもの未来に関わる多くの結実が生まれた。主な読書推進活動と関係する事項は、以下の通りである。

- 1993年3月、国が「学校図書館図書標準」を策定
- 国が「学校図書館図書整備費新5カ年計画」策定。1993年度～1997年度
- 1995年5月、民間の「国立の国際子ども図書館設立を推進する全国連絡会」設立（2000年10月「国際子ども図書館を考える全国連絡会」に改組）
- 1995年6月、超党派国会議員による「国際子ども図書館設立推進議員連盟」設立（2000年5月「子どもの未来を考える議員連盟」に改組）
- 1996年6月、「学校図書館整備推進会議」設立
- 1997年6月、「学校図書館法」改正。2003年度から公立諸学校12学級以上に司書教諭配置
- 1998年6月、超党派国会議員による「学校図書館議員懇談会」設立
- 1999年1月、民間の「子ども読書年推進会議」設立（2001年6月「子どもの読書推進会議」に改組）
- 1999年7月、政治、行政、民間の共同組織「子ども読書年実行委員会」設立
- 1999年8月、衆参両院全会一致による「子ども読書年に関する決議」採択
- 2000年「子ども読書年」
- 2000年5月、「国際子ども図書館」開設（2002年5月全面開館）
- 2000年11月、ブックスタート運動開始（2002年1月「NPOブックスタート支援センター」設立）
- 2001年4月、国が「子ども夢基金」創設。民間の読書活動を助成
- 2001年12月、「子どもの読書活動の推進に関する法律」公布
- 2002年8月、国の「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」策定
- 国が「学校図書館図書整備5カ年計画」策定。2002年度～2006年度

この数年来、草の根では多様な読書活動が展開されてきた。学校における「朝の読書」は、40,000余校のうち14,000校で実施され、ブックスタート運動は、3,200余自治体のうち650自治体で開始されている。地域に根ざした5,500を超える「子ども文庫」や書店での「読み聞かせ」活動、ブック・モービルによる全国的な「読み聞かせ」も展開されている。しかしながら、教育改革に伴って必要とされる学校図書館の整備充実は不十分であり、町村における公共図書館の設置率は40%である。子どもの読書環境には、大きな地域格差

がある。

「子どもの読書活動推進法」の基本理念は、「子ども（おおむね 18 歳以下の者をいう）の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものであることにかんがみ、すべてのこどもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」としている。同法の根底には、「日本国憲法」とその理想の実現を図る人間の育成を期した「教育基本法」の理念が受け継がれている。しかし、子どもをとりまく状況はこの理想にはほど遠く、環境破壊や暴力そして戦争の危機、政治的、経済的混乱、社会や教育の不安、未来への懐疑など、私たちは、子どもたちに多くの負の遺産を残した。私たちは、子どもをどのように育むのか、子どもにどのような世界を手渡すのかが深く問われている。

しかし、希望はある。「子どもの読書活動推進法」は、21 世紀を真に子どもの時代として拓く指針となり、その理念を生かすことが希望の鍵になるのではないか。同法は、自治体と地域住民の「自主性」を重んじ、保護者の役割に期待し、「民意の反映」と事業者や教師、図書館員の「自主性」に配慮している。出版に携わる者も含め事業者に対しては、「子どもの健やかな成長に資する書籍等の提供」に「自主的」に努めることが求められている。同法の理念を生かし、実体化することが、今後の絶え間ない課題である。

子どもたちが楽しみ、言葉と知と想像力を豊かに育む本を贈ることは、私たち出版人の願いである。読書に親しむ子どもを育むことは、子どもの明日を拓き、出版文化の土壌を豊かにする源であると考えている。

〈小峰紀雄〉

## サロン・ド・リーブル・ジュネス「日本年」実行委員会

### 構成団体

日本書籍出版協会  
日本児童図書出版協会  
ヤングアダルト出版会

### 委員長

小峰 紀雄 (日本児童図書出版協会会長、小峰書店)

### 委員

浦城 寿一 (書協児童書部会長、さ・え・ら書房)  
図師 尚幸 (書協児童書部会、ほるぷ出版)  
山下 正 (書協専務理事)  
高木 正 (児童出協事務局長)  
下向 実 (ヤングアダルト出版会、理論社)  
コリーヌ・カンタン (フランス著作権事務所)  
吉田 ゆりか (日本著作権輸出センター)

## サロンドリーブルジュネス参加者名簿

No. 氏名	勤務先	部署・役職
小峰 紀雄	小峰書店	社長
芳賀 八恵	8 plus	代表
土門 康男	講談社	児童局長
小西 宏行	スカイフィッシュグラフィックス	代表
仙波 敦子	榊汐文社	編集部
西村 正徳	西村書店	社長
吉田 ゆりか	榊日本著作権輸出センター	児童書部長
森 岳人	榊ベレ出版	営業部課長
小宮山 民人	榊理論社	取締役編集部長
遠藤 真人	翻訳業	
樋口 清一	日本書籍出版協会	調査部長